

海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	松山 真人 印
所属機関	公益財団法人 がん研究会 有明病院
・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名	Digestive Disease Week 2017 米国消化器関連学会週間
渡航期間	自 平成 29 年 5 月 6 日 至 平成 29 年 5 月 10 日
・研究内容 ・国際学会・会議内容	悪性肝門部胆管閉塞に対する術前胆道ドレナージの多施設共同後ろ向き研究： EPOD-hilar A retrospective study of endoscopic/percutaneous preoperative biliary drainage for malignant hilar biliary obstruction
<p>研究成果 (要約: 800 字)</p> <p>本邦において悪性肝門部胆道閉塞に対する術前ドレナージは ENBD (内視鏡的経鼻胆道ドレナージ) を推奨する報告が多いが、QOL を考慮した EBS(endoscopic biliary stent)や高度分断例での PTBD が選択されることも少なくない。今回、多施設・多数例での術前ドレナージの現状と、その安全性・有効性を検討し報告した。</p> <p>対象は切除企図悪性肝門部胆道閉塞に対する初回ドレナージ 374 例。検討項目は初回ドレナージ・偶発症・減黄成功率及び減黄期間・手術待期間・Re-intervention・予後。年齢中央値 70 歳、男性 66%、肝外胆管癌 70%/肝内胆管癌 18%/胆嚢癌 11%、BismuthI-II40 %、初回ドレナージ ENBD/EBS/PTBD75%/20%/3%。偶発症として内視鏡ドレナージ後膵炎を 15%に合併、その危険因子(オッズ比)は EST 非施行(2.53, p=0.01)。初回ドレナージ減黄成功率 77.8%、減黄期間中央値は 17 日。切除症例での初回 Re-intervention までの期間は、中央値 17 日 (初回 ENBD 群 15 日、EBS 群 49 日)、予定外処置危険因子(オッズ比)は、肝外胆管癌(2.26, p=0.01)、TB\geq10(2.48, p<0.01)。最終切除率 90%、手術待期間 36 日。生存期間は切除例 4.3 年、非切除例 1.1 年。肝外胆管癌切除 238 例の予後因子 (ハザード比) は、ドレナージ前胆管炎(2.15, p=0.03)、予定外処置(1.96, p<0.01)であった。</p> <p>肝門部悪性胆道閉塞の術前ドレナージでは、手術待期間は 36 日と長く、ENBD で短期間での Re-intervention が増えたものの、内外瘻による成績の有意な違いは認めなかった。予定外処置が 31%にみられ、術前肝門部悪性狭窄の予後との関連がみられた。質疑応答及び他報告から、欧米において QOL 重視で EBD 留置が選択されることが圧倒的に多いという印象を受けた。今回の study では背景因子に差を認めるものの ENBD、EBD に有意な成績の差を認めておらず、EBD 留置は症例や手術待期間に応じて検討すべき処置と考えられる。現在術前減黄術として inside stent (胆管内プラスチックステント埋め込み) が選択されつつあり、今後前向きに同ステントの有用性について検討する余地があると考え。今回同分野での報告は稀であり、研究発表は大きな意義があった。</p>	